

2006年8月13日 聖霊降臨節第11主日礼拝

『復活の望み』

(ダニエル12章1～3、使徒言行録22章30～23章11)

「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました」(23章1)。パウロは、ユダヤの人びとに訴えられました。直接の理由は、パウロが「民と律法とこの場所を無視することを・・・教えている」。「その上、ギリシア人を(神殿の境内に連れ込んで、聖なる場所を汚した)」というものでした(21章28)。しかし千人隊長は、得心できませんでした。なぜパウロが、こうまでしてユダヤ人たちに憎まれ、訴えられるのか？ 真相を知りたいと思いました。そこでパウロの鎖を外すと、ユダヤの最高法院の招集を命じ、パウロを取り調べることにしたのです。

まずパウロが、最初に口を開きました。「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました」(23章1)。根も葉もないことで、自分は訴えられている。しかし私は、神の前で恥じることはしていない。「わたしは今日に至るまで、良心に従って、神の御前を歩んできたのです」。そうパウロは申しました。ここには、忠実なユダヤ教徒として、誠実に信仰生活に励んできたと言われていました。すなわち、神様に選ばれた民であることに決しておごることなく、主なる神がユダヤの民にお遣わしくくださった救い主イエス・キリストを、心から信じ受け入れて歩んできたこと。罪深い自分がイエス・キリストにより赦されて、新しい命に生かされてきたことを、訴えました。

ところが、これを聞いた大祭司アナニアは、パウロの口を打つように命じました。パウロが語る言葉を、聞くに堪えないものと思ったのでしょうか。これに、パウロは激しく抗議をしました。「あなたは律法に従ってわたしを裁く立場にいながら、律法に背いて、わたしを打てと命じるのですか」(3節)。ろくな取り調べもせずに、被告人を打ち叩くことは、律法でも禁じられていたのです。

わたしたちの主イエス・キリストも、かつて同じ目に遭われました。いわれない罪で裁きかけられたとき、人々は「イエスの顔に唾を吐きかけ、こぶしで殴り、ある者はひら手で打ちながら」言いました。「メシア、お前を殴ったのはだれか、言い当ててみる」(マタイ26章67～68)。大祭司の尋問に答えたときも、「大祭司に向かって、そんな返事の仕方があるか」と言われ、主イエスは平手で打たれました(ヨハネ18章22)。

パウロは今、主イエスが味わったのと同じ苦しみ、試練と戦っています。人は、主イエスと同じ苦しみを味わうなかで、信仰が成長させられていきます。主イエスと同じ苦しみ、試練に出会うたびに、主イエスの語られたみ言葉が心に迫ってくるのです。パウロは言いました。大祭司に向かって、「白い壁よ」と。これはかつて主イエスが言われた言葉を思い起こさせます。「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れに満ちている」

(マタイ 23 章 27)。主イエスと同じ苦しみ、同じ試練に出会うとき、主イエスの語られた言葉が、わたしたちに迫ってきます。試練の中で、いつしかわたしたちは、主イエスが感じられたように感じ、主イエスが語られたように語り、主イエスが歩まれたように、この道をたどります。「主が共におられる」恵み、「主と共に歩むことのできる」幸いが、わたしたちを包むのです。このことは、これからパウロが経験する出来事の中で、いよいよはっきりしていきます。

厳しい取り調べを受けながらも、パウロは非常に冷静でした。主イエスを思う信仰が、パウロの平安を保ったのでしょう。ユダヤ人たちのこの集まりは、よく見ると、二つの相反するグループから成っていました。議員の一部はサドカイ派の人びと、もう一方はファリサイ派の人びと。パウロ自身、ファリサイ派に属していました。これに気づいたパウロは、反撃に出ます。わたしたち教会にとって、もっとも大切な信仰をもって攻めに転じます。「兄弟たち、わたしは生まれながらのファリサイ派です。死者が復活するという望みを抱いていることで、わたしは裁判にかけているのです」(8 節)。わたしたちは、復活の望みに生きています。イエス・キリストが、ひとたび十字架の上で命を失われたあと、三日目に死人の中からよみがえられたことを、わたしたちは信じています。最も大切なこととして、聖書がこれを証しているからです。この希望は、単に、人は死んでも生きるというに留まりません。なぜなら、主イエスの復活は、わたしたちをとらえてやまない罪と死の終わりを意味するからです。確かに主イエスは、わたしたち人類の罪をすべて背負って十字架にかかりました。本来なら何の罪もなく、裁きも死も味わう必要のない御方が、わたしたちの代理となって、それらを経験されたのです。それゆえ主なる神はイエス・キリストをよみがえらせ、天高くあげられました。わたしたち罪人を待ち受けていた永遠の死と裁き、そして滅びは、キリストのゆえに、もはや何の力も持たなくなったのです。キリストを信じるとき、わたしたちはキリストの支配の中に入れられています。キリストの御手の中に守られている限り、死も裁きも、もはやわたしたちを滅ぼすことはできません。こうしてキリストに結ばれてわたしたちは、罪に死に、新しい命に生きることができるのです。キリストと共に古い自分に死に、キリストに結ばれて、復活の望みに生きる。わたしたちの未来も、世界の将来も、すべてはここに掛かっています。

パウロは、この救いを信じていました。それで声を大にして、叫ばずにおれなかったのです。「わたしは、死者が復活するという望みを抱いているために、裁かれようとしているのです」。

パウロが大声でこう言った途端、議会は分裂しました。ファリサイ派とサドカイ派の人びとの間で、激しい論争が起こったからです。サドカイ派は、旧約時代からの祭司の家系です。非常に保守的な信仰で、聖書にはっきりと書かれていないことは信じない。そういう立場をとっていました。そのため、死人の復活とか天使などは信じていませんでした。これとは対照的にファリサイ派の人びとは、その信仰が革新的で、常に前進と成長を掲げていました。それゆえ、旧約聖書の終りの方に出てくる復活の希望、永遠の命に、望みを

かけていました。ダニエル書 12 章に書かれているとおりです。終りの日、それまで産みの苦しみを耐え忍んだ聖徒たちに、神は大いなる慰めと祝福を与え報いてくださる。「その時には救われるであろう。お前の民、あの書に記された人々は。多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の命に入るだろう（ダニエル 12 章 1~2 より）。

パウロは生まれながらのファリサイ派でありました。かつて、この希望を胸に抱いて、生きてきました。しかしこの希望は、ユダヤの古い信仰では、全うされることはありませんでした。律法を自らの力で行なうのでは、復活の希望を実現することなどできなかったのです。しかしパウロは知りました。イエス・キリストを。出逢いました。イエス・キリストに。わたしたちの罪を身におびて、自ら死を味わい、そこから復活された唯一の御方を、わたしの救い主として、パウロは信じて受け入れました。そのとき、朽ち果てるべきこの身に、復活の命が宿ったことを、パウロは知ったのです。キリストがわたしたちの罪のために献げられた命。その命が、今のわたしを生かしている。これからのわたしを、永遠の命へと養ってくださる。イエス・キリストの十字架と復活に、パウロはとこしえの希望を見出すことができました。

パウロが証した復活の希望、復活の信仰。これを聞くや、ファリサイ派の人々は、何とパウロに無罪を言い渡しました。「この人には何の悪い点も見だせない」（9 節）。こうしてパウロの無罪が、明かとなりました。しかしパウロは、決して無罪放免となったわけはありません。パウロが宣べ伝えた復活の希望、これが元になって、議会は大混乱に陥りました。パウロの身にさらなる危険が迫っていました。この危険から、またしても神は、パウロを助け出してくださいました。異邦人の千人隊長が、パウロの身を案じて兵士たちを送り、力づくでパウロを助け出してくれたのです。どんな所にも、必ず神の御手は働いています。主を信じ続けるならば、この神の助けに、あずかることができるのです。

大混乱の一日を終えて、パウロはその夜、兵営で休んでおりました。そのときです。復活の主イエスが、パウロのすぐそばに立って語りかけました。「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証したように、ローマでも証しをしなければならない」（11 節）。激しい試練の末に、パウロはまたしても耳にすることが出来ました。慰めと励ましに満ちた、主イエス・キリストの声を。それは、希望と救いに満ちた天の調べであったに違いありません。臆することなく大胆に、敵の前でキリストを証したパウロ。しかし本当はこわかったのではないのでしょうか？ 居並ぶ敵を前にして、誰一人味方はおらず、体が震え出して止まらない。孤独な、試練の日を過したのかもかもしれません。しかし、そのようなとき、キリストがわたしたちの味方となってくださいました。

イエス・キリストこそ、わたしたちの味方です。何の助けも期待出来ず、たった一人で孤独な戦いを強いられているとき。見上げてください。わたしたちの主イエスは、見よ、あなたのすぐそばにおられます。あなたのすぐ隣にいて、あなたと共に苦しみ、共に戦い、そして復活の望みでわたしたちを立ちあがらせてくださいます。だから「勇気を出しなさい。わたしはここにいる。わたしにつながっていなさい。そうすれば、どこに行っても、

あなたはわたしイエス・キリストを証しすることができます。」 主といつまでも共にいられること、主がとこしえまでも、わたしたちと共にいてくださること。これこそが、復活の望みであり、わたしたちの希望です。

[説教者：堀地正弘牧師]